

「平成30年7月豪雨」 災害へのボランティア派遣

いとう あきひで
伊藤 彰英

●基幹労連・事務局次長

「平成30年7月豪雨」は、多くの尊い命を奪うとともに、家族で団欒のときを過ごす家を奪い、そして住み慣れた街を破壊していった。被災された皆様には、心からのお見舞いと哀悼の意を捧げたい。

基幹労連は7月11日に中央災害対策本部を立ち上げるとともに、災害救援ボランティアとしてのJBUパワーバンクの出動を直ちに決定した。

JBUパワーバンクとは、2003年に基幹労連が旧産別の統合によって結成され、その後新産別ならではの活動を模索する中で、26万人組織としての社会的責任を果たす観点から、2009年に独自に立ち上げたボランティア組織である。当時の世の中のボランティア活動は“一生懸命”という思いだけが先に立ち、我を忘れて救援活動に勤しんだ結果、ともすれば熱中症などの二次災害を招いたり、準備不足によって地域住民の生活を損なうような事象も散見されていた。そこで基幹労連は、「わが身わが命は自らで守る」を合言葉に、災害救援ボランティアへの人材登録希望者に対する教育を行い、自己完結の活動をめざしてきた。希望者による任意の登録であるにも関わらず、ありがたいことに全国で2,500人にも届こうかという方々に登録していただき、定期的に教育訓練を受講していただいている。

少々前置きが長くなったが、基幹労連は地域での役割を果たしたうえで、被災地域を除く全国から別動隊として、岡山県に7月20日から8月11日までの間、毎日20人をボランティア派遣することとした。募集を発信すると同時に、東

北から、熊本から多くの問い合わせをいただいた。大阪をはじめ愛媛や兵庫、京都などの被災している隣県からは、救援活動を被害の甚大な岡山や広島に集中してほしいとの言葉もいただいた。これまでの恩返し、厳しい状況におかれつつも他者を気に掛ける心、本当に困っているときこそ何とかしたいという思い、連帯と相互扶助の精神が日本中を駆け巡った。JBUパワーバンクに登録していただいている方々は有給休暇やボランティア休暇を申請しながら自主的に参加を希望し、1週間もしないうちに全ての日程が善意で埋め尽くされた。

連日の酷暑により、活動環境は気温40度、湿度70%という過酷を極める状況にある。もちろん体調管理には相互に細心の注意を払いつつも、私たちは「暑い」と言わないことを決めごとに行っている。被災された方々は、こうした環境とも毎日闘っているのだから。

お盆明けからは、これまでの岡山の継続とともに、広島にも災害救援ボランティアを派遣することを決定した。9月上旬の定期大会を挟んで、それ以降も出動を検討している。マスコミ報道のあるうちはボランティアも活況だと思われるが、報道が止むと活動が停滞するのは、これまでの災害復興で学んできたことである。今こそ私たち労働組合が、スケールメリットを活かした活動によって社会的責任を果たしていかなければならない。

それと同時に、地域の自主・自立に向けては、引き際も考えて行動しなければならないことを強く意識している。